

一兵卒

田山花袋



渠は歩き出した。

銃が重い、背囊はいのうが重い、脚あしが重い、アルミニウム製の金腕かなわんが腰の剣に当たつてカタカタと鳴る。その音が興奮した神経をおびただしく刺戟しげきするので、幾度かそれを直してみたが、どうしても鳴る、カタカタと鳴る。もう厭いやになつてしまつた。

病気はほんとうに治つたのでないから、息が非常に切れる。全身には悪熱悪寒が絶えず往来する。頭脳が火のように熱して、顛顛こめかみがはげしい脈を打つ。なぜ、病院を出た？ 軍医があとがたいせつだと言つてあれほど留めたのに、なぜ病院を出た？ こう思ったが、渠はそれを悔いはしなかつた。敵の捨てて遁にげた汚きたない洋館の板敷き、八畳へやくらいの室に、病兵、負傷兵が十五人、衰頹すいたいと不潔と叫喚と重苦しい空気と、それにすさまじい蠅はえの群集、よく二十日も辛抱していた。麦飯の粥かゆに少しばかりの食塩、

よくあれでも飢餓を凌しのいだ。かれは病院の背後の便所を思い出してゾツとした。急造の穴の掘りようが浅いので、臭気が鼻と眼とをはげしく撲うつ。蠅がワンと飛ぶ。石灰の灰色に汚よごれたのが胸をむかむかさせる。

あれよりは……あそこにいるよりは、この闊ひろびろ々とした野の方がいい。どれほど好いかしれぬ。満洲の野は荒漠こうばくとして何も無い。畑にはもう熟しかけた高粱こうりやんが連なっているばかりだ。けれど新鮮な空気がある、日の光がある、雲がある、山がある、——すさまじい声が急に耳に入ったので、立ち留まってかれはそつちを見た。さつきの汽車がまだあそこにいる。釜かまのない煙筒のない長い汽車を、支那苦力クワリーが幾百人となく寄つてたかつて、ちよあうど蟻が大きな獲物を運んでいくように、えつさらおつさら押していく。

夕日が画のように斜めにさし渡った。

さつきの下士があそこに乗っている。あの一段高い米の吠かますの積み荷の上に突つ立っているのが彼奴だきやつ。苦しくつてとても歩けんから、鞍山あんざん站まで乗せていってくれと頼んだ。すると彼奴め、兵を乗せる車ではない、歩兵が車に乗るといふ法があるかとどなった。病気だ、ご覧の通りの病気で、脚かつけ気をわずらっている。鞍山站の先まで行けば隊がいるに相違ない。武士は相見互いということがある、どうか乗せてくれッて、たつて頼んでも、言うことを聞いてくれなかつた。兵、兵といって、筋が少ないとばかりにしやがる。金州でも、得利寺でも兵のおかげで戦争に勝つたのだ。馬鹿ばか奴め、悪魔奴！

蟻だ、蟻だ、ほんとうに蟻だ。まだあそこにいやがる。汽車もああなつてはおしまいだ。ふと汽車——豊橋を発たつてきた時

の汽車が眼の前を通り過ぎる。停車場は国旗で埋められている。万歳の声が長く長く続く。と忽然最愛の妻の顔が眼に浮かぶ。それは門出の時の泣き顔ではなく、どうした場合であつたか忘れたが心からかわいいと思つた時の美しい笑い顔だ。母親がお前もうお起きよ、学校が遅くなるよと揺り起こす。かれの頭はいつか子供の時代に飛び返つてゐる。裏の入江の船の船頭が禿頭を夕日にてかてかと光らせながら子供の一群に向かつてどなつてゐる。その子供の群れの中にかれもいた。

過去の面影と現在の苦痛不安とが、はつきりと区画を立てておりながら、しかもそれがすれすれにすりよつた。銃が重い、背囊が重い、脚が重い。腰から下は他人のようで、自分で歩いているのかいないのか、それすらはつきりとはわからぬ。

褐色の道路——砲車の轍や靴の跡や草鞋の跡が深く印したま

まに石のように乾いて固くなつた路みちが前に長く通じている。こういう満州の道路にはかれはほとんど愛想をつかしてしまつた。どこまで行つたらこの路はなくなるのか。どこまで行つたらこんな路は歩かなくなつてもよくなるのか。故郷のいさご路じ、雨上がりの湿つた海岸の砂路いさごじ、あの滑らかな心地の好い路なつかが懐しい。広い大きい道ではあるが、一つとして滑らかな平らかなところがない。これが雨が一日降ると、壁土のように柔らかくなつて、靴どころか、長い脛すねもその半ばを没してしまふのだ。大石橋だいせつぎょうの戦争の前の晩、暗い闇やみの泥濘でいねいを三里もこねまわした。背の上から頭の髪まではねが上がつた。あの時は砲車の援護が任務だつた。砲車が泥濘の中に陥つて少しも動かぬのを押して押して押し通した。第三聯隊れんたいの砲車が先に出て陣地を占領してしまわなければ明日の戦いではできなかつたのだ。そして終夜働いて、翌日

はあの戦争。敵の砲弾、味方の砲弾がぐんぐんと厭な音を立てて頭の上を鳴って通った。九十度近い暑い日が脳天からじりじりと照りつけた。四時過ぎに、敵味方の歩兵はともに接近した。小銃の音が豆を煎るいように聞こえる。時々シュツシュツと耳のそばを掠かすめていく。列の中であつと言つたものがある。はつと思つて見ると、血がだらだらと暑い夕日に彩いろどられて、その兵士はガツクリ前に踏のめつた。胸に弾丸があたつたのだ。その兵士は善い男しんしろまちだつた。快活で、洒脱しゃだつで、何なごとにも気が置けなかつた。新城町しんしろまちのもので、若い鼻かかあがあつたはずだ。上陸当座はいつしよによく徴発に行つたつけ。豚を逐おい廻まわしたつけ。けれどあの男はもはやこの世の中にいないのだ。いないとはどうしても思えん。思えんがいないのだ。

褐色の道路を、糧餉ひょうこうを満載した車がぞろぞろ行く。驟車らしや、驢車ろしや、

支那人の爺おやじのウオウオウイウイが聞こえる。長い鞭むちが夕日に光つて、一種の音を空気に伝える。路の凸凹でこぼこがはげしいので、車は波を打つようにしてガタガタ動いていく。苦しい、息が苦しい。こう苦しくつてはしかたがない。頼んで乗せてもらおうと思つてかれは駆け出した。

金腕がカタカタ鳴る。はげしく鳴る。背囊の中の雑品や弾丸袋の弾丸がけたたましく躍おどり上がる。銃の台が時々脛すねを打って飛び上がるほど痛い。

「オーい、オーい」

声が立たない。

「オーい、オーい」

全身の力を絞つて呼んだ。聞こえたに相違ないが振り向いてもみない。どうせ碌ろくなことではないと知っているのだらう。一

時思とい止とまったが、また駆け出した。そして今度はその最後の
一輛いちりょうにようやく追おい着きいた。

米の吠わが山のように積たんである。支那人の爺おやが振り向むいた。
丸顔まるがほの厭いやな顔だ。有無あやうをいいわせずその車くるまに飛とび乗のった。そして
吠わと吠わとの間に身みを横よこたえた。支那人はしかたがないというふ
うでウオーウオーと馬うまを進すすめた。ガタガタと車くるまは行く。

頭脳ずなうがぐらぐらして天地てんちが廻かいてん転てんするようだ。胸むねが苦くるしい。頭
が痛い。脚あしの腓ふくらはぎのところが押おしつけられるようで、不愉快ふげきで不
愉快ふげきでしかたがない。ややともすると胸むねがむかつきそうになる。
不安ふあんの念ねんがすさまじい力で全身ぜんしんを襲襲った。と同時に、恐おそろしい
動揺どうごうがまた始はまって、耳みみからも頭あたまからも、種々しんしんの声こゑが囁ささいてく
る。この前まへにもこうした不安ふあんはあつたが、これほどではなかつ
た。天あまにも地ちにも身みの置おきどころがないような気がする。

野から村に入ったらしい。鬱蒼こんもりとした楊やなぎの緑がかれの上に靡なびいた。楊樹やなぎにさし入った夕日の光が細かな葉を一葉一葉明らかにを見せている。不恰好ぶかつこうな低い屋根が地震でもあるかのように動揺しながら過ぎていく。ふと気がつくくと、車は止まっていた。かれは首を挙あげてみた。

楊樹の蔭かげを成しているところだ。車輛くるまが五台ほど続いているのを見た。

突然肩を捉えるものがある。

日本人だ、わが同胞だ、下士だ。

「貴様はなんだ？」

かれは苦しい身を起こした。

「どうしてこの車に乗った？」

理由を説明するのがつらかった。いや口をきくのも厭なのだ。

「この車に乗っちゃいかん。そうでなくつてさえ、荷が重すぎるんだ。お前は十八聯隊だナ。豊橋だナ」

うなずいてみせる。

「どうかしたのか」

「病気で、昨日まで大石橋の病院にいたものですから」

「病気がもう治なおったのか」

無意味にうなずいた。

「病気でつらいだろうが、おりてくれ。急いで行かんけりやならんのだから。遼陽りょうようが始まったでナ」

「遼陽！」

この一語はかれの神経を十分に刺戟した。

「もう始まったですか」

「聞こえんかあの砲が……」

さつきから、天末に一種のとどろきが始まったそうなどは思つたが、まだ遼陽ではないと思つていた。

「鞍山站あんざんたんは落ちたですか」

「おととい昨日落ちた。敵は遼陽の手前で、ひとふせぎ一防禦やるらしい。今日の六時から始まったという噂うわさだ！」

一種の遠いかすかなるとどろき、仔細しさいに聞けばなるほど砲声だ。例の厭な音が頭上を飛ぶのだ。歩兵隊がその間を縫つて進撃するのだ。血汐ちしおが流れるのだ。こう思った渠は一種の恐怖と憧憬どうけいとを覚えた。戦友は戦っている。日本帝国のために血汐を流している。

修羅しゆらの巷ちまたが想像される。炸彈さくたんの壯観も眼前に浮かぶ。けれど七、八里を隔てたこの満洲の野は、さびしい秋風が夕日を吹いているばかり、大軍の潮のごとく過ぎ去つた村の平和はいつも

に異ならぬ。

「今度の戦争は大きいだろう」

「そうさ」

「一日では勝敗がつくまい」

「むろんだ」

今の下士は夥伴なかまの兵士と砲声を耳にしつつしきりに語り合っている。糧餉を満載した車五輛、支那苦力の爺連おやじれんも圈わをなして何ごとをかしゃべり立てている。驢馬の長い耳に日がさして、おりおりけたたましい啼き声なが耳を劈つんざく。楊樹の彼方かなたに白い壁の支那民家が五、六軒続いて、庭の中に槐えんじゆの樹が高く見える。井戸がある。納屋なやがある。足の小さい年老いた女がおぼつかなく歩いていく。楊樹を透かして向こうに、広い荒漠たる野が見える。褐色した丘陵の連続が指さされる。その向こうには紫色

がかつた高い山が蜿蜒えんえんとしている。砲声はそこから来る。

五輛の車は行ってしまった。

渠かれはまた一人取り残された。海城から東煙台、甘泉堡かんせんほう、この

次の兵站部へいたんぶ所在地は新台子といつて、まだ一里くらいある。そこまで行かなければ宿るべき家もない。

行くことにして歩き出した。

疲れ切っているから難儀だが、車よりはかえつていい。胸は依然として苦しいが、どうもいたしかたがない。

また同じ褐色の路、同じ高粱コーリヤンの畑、同じ夕日の光、レールには

例の汽車がまた通った。今度は下り坂で、速力が非常に早い。釜かまのついた汽車よりも早いくらいに目まぐるしく谷を越えて駛はしつた。最後の車輛ひるがえに翻った国旗が高粱畑の絶え間絶え間に見えた

り隠れたりして、ついにそれが見えなくなつても、その車輛のとどろきは聞こえる。そのとどろきと交じつて、砲声が間断なしに響く。

街道には久しく村落がないが、西方には楊樹のやや暗い繁茂しげりがいたるところにかたまつて、その間からちらちら白色褐色の民家が見える。人の影はあたりを見まわしてもないが、青い細い炊煙は糸のように淋さびしく立ち颯あがる。

夕日は物の影をすべて長く曳ひくようになった。高粱の高い影は二間幅の広い路を蔽おほつて、さらに向こう側の高粱の上に蔽い重なつた。路傍の小さな草の影もおびただしく長く、東方の丘陵は浮き出すようにはつきりと見える。さびしい悲しい夕暮れは譬たとえ難い一種の影の力をもつて迫つてきた。

高粱の絶えたところに来た。忽然こっぜん、かれはその前に驚くべき

長大なる自己の影を見た。肩の銃の影は遠い野の草の上にあつた。かれは急に深い悲哀に打たれた。

草叢くさむらには虫の音がする。故郷の野で聞く虫の声とは似もつかぬ。この似つかぬことと広い野原とがなんとなくその胸を痛めた。一時とだえた追懐の情が流るるように漲みなぎつてきた。

母の顔、若い妻の顔、弟の顔、女の顔が走馬燈のごとく旋回する。櫻けやきの樹で囲まれた村の旧家、団欒だんらんせる平和な家庭、続

てその身が東京に修業に行つたおりの若々しさが憶おもい出される。

神楽坂かぐらざかの夜の賑にぎわいが眼に見える。美しい草花、雑誌店、新刊の

書、角を曲がると賑やかな寄席よせ、待合、三味線しやみせんの音、仇あだめいた

女の声、あのころは楽しかった。恋した女が仲町にいて、よく

遊びに行つた。丸顔のかわいい娘で、今でも恋しい。この身は

田舎いなかの豪家の若旦那わかだんなで、金には不自由を感じなかつたから、ず

いぶんおもしろいことをした。それにあのころの友人は皆世に出てゐる。この間も蓋平がいへいで第六師団の大尉になつていばつてゐる奴でつくわに邂逅した。

軍隊生活の束縛ほど残酷なものはないと突然思った。と、今日
は不思議にも平生の様に反抗とか犠牲とかいう念は起こらずに、
恐怖の念が盛んに燃えた。出発の時、この身は国に捧げ君に捧
げて遺憾いかんがないと誓つた。再びは帰つてくる気はないと、村の
学校で雄々しい演説をした。当時は元氣旺盛、身体壮健であつ
た。で、そう言つてももちろん死ぬ気はなかつた。心の底には
はなばなし凱旋がいせんを夢みていた。であるのに、今忽然起こつた
のは死に対する不安である。自分はとても生きて還かえることはお
ぼつかないという気がはげしく胸を衝いた。この病、この脚氣、
たといこの病は治つたにしても戦場は大なる牢獄である。いか

にもがいても焦^{あせ}つてもこの大なる牢獄から脱^{あせ}することはできぬ。得利寺で戦死した兵士がその以前かれに向かつて

「どうせ遁^{のが}れられぬ穴だ。思い切りよく死ぬサ」と言つたことを思い出した。

かれは疲労と病氣と恐怖とに襲われて、いかにしてこの恐ろしい災厄^{のが}を遁^{のが}るべきかを考えた。脱走？ それもいい、けれども捕えられた暁には、この上もない汚名をこうむつたうえに同じ

く死！ さればとて前進すれば必ず戦争の巷^{ちまた}の人とならなければならぬ。戦争の巷^{ちまた}に入れば死を覚悟しなければならぬ。かれは今始めて、病院を退院したことの愚をひしと胸に思い当たつた。病院から後送されるようにすればよかつた……と思つた。

もうだめだ、万事休す、遁^{のが}れるに路^{みち}がない。消極的の悲觀が恐ろしい力でその胸を襲つた。と、歩く勇氣も何もなくなくなつて

しまった。とめどなく涙が流れた。神がこの世にいますなら、どうか救たすけてください、どうか遁路にげみちを教えてください。これからはどんな難儀もする！　どんな善事もする！　どんなことにも背そむかぬ。

渠かれはおいおい声を挙あげて泣き出した。

胸むねが間断ひつきりなしに込み上げてくる。涙は小児でもあるように頬ほおを流れる。自分の体がこの世の中になくなるということが痛切に悲しいのだ。かれの胸にはこれまで幾度も祖国を思うの念が燃えた。海上の甲板かんばんで、軍歌を歌った時には悲壮の念が全身に充みち渡った。敵の軍艦が突然出てきて、一砲弾のために沈められて、海底の藻屑もくずとなつても遺憾がないと思つた。金州の戦場では、機関銃の死の叫びのただ中を地に伏しつつ、勇ましく進んだ。戦友の血まみに塗れた姿に胸を撲うつたこともないではないが、

これも国のためだ、名誉だと思つた。けれど人の血の流れたのは自分の血の流れたのではない。死と相面あいまんしては、いかなる勇者も戦慄せんりつする。

脚が重い、けだるい、胸がむかつく。大石橋から十里、二日の路、夜露よかづ、悪寒おかん、確かに持病の脚気かっけが昂進こうしんしたのだ。流行腸胃熱なほは治つたが、急性の脚気が襲つてきたのだ。脚気衝心の恐ろしいことを自覚してかれは戦慄した。どうしても免れることができぬのかと思つた。と、いても立つてもいられなくなつて、体がしびれて脚がすくんだ——おいおい泣きながら歩く。

野は平和である。赤い大きい日は地平線上に落ちんとして、空は半ば金色半ば暗碧色あんへきしよくになっている。金色こんじきの鳥の翼のような雲が一片動ひとひらいていく。高粱の影は影と蔽い重なつて、荒涼たる野には秋風が渡つた。遼陽方面りょうようほうの砲声も今まで盛んに聞こえて

いたが、いつか全くとだえてしまった。

二人連れの上等兵が追い越した。

すれ違つて、五、六間先に出たが、ひとりが戻つてきた。

「おい、君、どうした？」

かれは気がついた。声を挙げて泣いて歩いていたのが気恥ずかしかつた。

「おい、君？」

再び声はかかつた。

「脚気なもんですから」

「脚気？」

「はア」

「それは困るだろう。よほど悪いのか」

「苦しいです」

「それア困つたナ、脚気では衝心でもすると大変だ。どこまで行くんだ」

「隊が鞍山站あんざんたんの向こうにいるだろうと思うんです」

「だって、今日そこまで行けはせん」

「はア」

「まア、新台子まで行くさ。そこに兵站部があるから行って医師に見てもらおうさ」

「まだ遠いですか？」

「もうすぐそこだ。それ向こうに丘が見えるだろう。丘の手前に鉄道線路があるだろう。そこに国旗が立っている、あれが新台子の兵站部だ」

「そこに医師がいるでしょうか」

「軍医が一人いる」

蘇生そせいしたような気がする。

で、二人に跟ついて歩いた。二人は気の毒がつて、銃と背囊はいのうとを持ってくれた。

二人は前に立って話しながら行く。遼陽の今日の戦争の話である。

「様子はわからんかナ」

「まだやってるんだらう。煙台で聞いたが、敵は遼陽の一里手前ひとさきで一支ひとさきえしているそうだ。なんでも首山堡しゅざんぼとか言った」

「後備がたくさん行くナ」

「兵が足りんだ。敵の防禦陣地ぼうぎよはすばらしいものだそうだ」
「大きな戦争になりそうだな」

「一日砲声ひつてつがしたからナ」

「勝てるかしらん」

「負けちゃ大変だ」

「第一軍も出たんだろうナ」

「もちろんさ」

「ひとつうまく背後を断たつてやりたい」

「今度はきつとうまくやるよ」

と言つて耳を傾けた。砲声がまた盛んに聞こえ出した。

新台子の兵站部は今雑沓ざつとくを極めていた。後備旅団の一箇いっこん聯隊が着いたので、レールの上、家屋の蔭かげ、糧餉ひょうこうのそばなどに軍帽と銃剣とがみちみちていた。レールを挟はさんで敵の鉄道援護の営舎が五棟ほど立っているが、国旗の翻ひるがえつた兵站本部は、雑沓を重ねて、兵士が黒山のように集まって、長い剣を下げた士官が幾人となき出たり入ったりしている。兵站部の三箇の大釜おおがまには

火が盛んに燃えて、煙が薄暮の空に濃く靡なびいていた。一箇の釜は飯が既に炊たけたので、炊事軍曹が大きな声を挙げて、部下を叱しつ叱たして、集まる兵士にしきりに飯の分配をやっている。けれどこの三箇の釜はとうていこの多数の兵士に夕飯を分配するこ
とができぬので、その大部分は白米を飯盒はんごうにもらつて、各自に飯を作るべく野に散つた。やがて野のところどころに高粱の火が幾つとなく燃された。

家屋いえの彼方かなたでは、徹夜して戦場に送るべき弾薬弾丸の箱を汽車の貨車に積み込んである。兵士、輸卒の群れが一生懸命に奔走しているさまが薄暮のかすかな光に絶え絶えに見える。一人の下士が貨車の荷物の上に高く立って、しきりにその指揮をしていた。

日が暮れても戦争は止やまぬ。鞍山站ばんあんの馬鞍ばあんのような山が暗く

なつて、その向こうから砲声が断続する。

渠は^{かれ}ここに來て軍医をもとめた。けれど軍医どころの騒ぎではなかつた。一兵卒が死のうが生きようがそんなことを問う場合ではなかつた。渠は一人の兵士の尽力のもとに、わずかに一盒の飯を得たばかりであつた。しかたがない、少し待て。この聯隊の兵が前進してしまつたら、軍医をさがして、^つ伴れていつてやるから、まず落ち着いておれ。ここからまっすぐに三、四町行くと一棟の洋館がある。その洋館の入り口には、^{しゅほ}酒保が今朝から店を開いているからすぐわかる。その奥に入つて、寝ておれとのことだ。

渠はもう歩く勇氣はなかつた。銃と背囊^{はいのう}とを二人から受け取つたが、それを背負うと危^{あぶな}く倒れそうになつた。眼がぐらぐらする。胸がむかつく。脚がけだるい。頭脳ははげしく旋回する。

けれどここに倒れるわけにはいかない。死ぬにも隠れ家を求めなければならぬ。そうだ、隠れ家……。どんなところでもいい。静かな処に入つて寝たい、休息したい。

闇やみの路みちが長く続く。ところどころに兵士が群れを成している。

ふと豊橋とよはしの兵営を憶い出した。酒保に行つて隠れてよく酒を飲んだ。酒を飲んで、軍曹をなぐつて、重営倉に処せられたことがあつた。路がいかにも遠い。行つても行つても洋館らしいものが見えぬ。三、四町と言つた。三、四町どころか、もう十町も来た。間違つたのかと思つて振り返る——兵站部は燈火の光、篝火かがりびの光、闇の中を行き違ふ兵士の黒い群れ、弾薬箱を運ぶかけ声が夜の空気を劈つんざいて響く。

ここらはもう静かだ。あたりに人の影も見えない。にわかには苦しく胸が迫つてきた。隠れ家がなければ、ここで死ぬのだと

思つて、がつくり倒れた。けれども不思議にも前のように悲しくもない、思い出もない。空の星の閃ひらめきが眼に入つた。首を拳あげてそれとなくあたりを眺みまわした。

今まで見えなかつた一棟の洋館がすぐその前にあるのに驚いた。家の中には燈火が見える。丸い赤い提燈ちようちんが見える。人の声
が耳に入る。

銃を力にかろうじて立ち上がった。

なるほど、その家屋の入り口に酒保らしいものがある。暗いからわからぬが、何か釜らしいものが戸外の一隅かたすみにあつて、薪まきの余燼もえさしが赤く見えた。薄い煙が提燈を掠かすめて淡く靡なんでいる。提燈に、しるこ一杯五銭と書いてあるのが、胸が苦しくつて苦しくつてしかたがないにもかかわらずはつきりと眼に映じた。

「しるこはもうお終しまいか」

と言ったのは、その前に立っている一人の兵士であつた。

「もうお終いです」

という声が戸内うちから聞こえる。

戸内のぞを覗くと、明らかな光、西洋蠟燭ろうそくが二本裸ともで点つていて、鑿詰びんづめや小間物などの山のようにに積まれてある中央の一段高い処に、肥ふとつた、口髭くちひげの濃い、にこにこした三十男がすわつていた。店では一人の兵士がタオルを展ひろげて見ていた。

そばを見ると、暗いながら、低い石階いしだんが眼に入つた。ここだとかかれは思った。とにかく休息ひらすることができると思うと、言うに言われぬ満足まんぞくをまず心こころに感じた。静かにぬき足あししてその石階いしだんを登つた。中は暗い。よくわからぬが廊下らうかになつてゐるらしい。最初の戸かどと覚おぼしきところを押してみたが開かない。二歩三歩進んで次の戸かどを押したがやはり開かない。左の戸かどを押して

もだめだ。

なお奥へ進む。

廊下は突き当たってしまった。右にも左にも道がない。困つて右を押すと、突然、闇が破れて扉とびらがあいた。室内が見えるというほどではないが、そことなく星明りがして、前にガラス窓があるのがわかる。

銃を置き、背囊をおろし、いきなりかれは横に倒れた。そして重苦しい息をついた。まアこれで安息所を得たと思つた。

満足とともに新しい不安が頭を擡もたげてきた。倦怠けんたい、疲労、絶望に近い感情が鉛のごとく重苦しく全身を圧した。思い出が皆きれきれ片々で、電光のように早いかと思うと牛の喘歩あえぎのように遅おそい。間断なしに胸が騒ぐ。

重い、けだるい脚が一種の圧迫を受けて疼痛とうつうを感じてきたの

は、かれみずからにもよくわかつた。腓ふくらのところどころがずきずきと痛む。普通の疼痛ではなく、ちようどこむらが反かえつた時のようである。

自然と身体からだをもがかずにはいられなくなつた。綿のように疲れ果てた身でも、この圧迫にはかなわぬ。

無意識に輾てん転てん反側はんそくした。

故郷のことを思わぬではない、母や妻のことを悲しまぬではない。この身がこうして死ななければならぬかと嘆かぬではない。けれど悲嘆や、追憶や、空想や、そんなものはどうでもよい。疼痛、疼痛、その絶大な力と戦わねばならぬ。

潮のように押し寄せる。暴風のように荒れわたる。脚を固い板の上に立てて倒して、体を右に左にもがいた。「苦しい……」と思わず知らず叫んだ。

けれど実際はまたそう苦しいとは感じていなかった。苦しいには違いないが、さらに大なる苦痛に耐えなければならぬと思う努力が少なくともその苦痛を軽くした。一種の力は波のように全身に漲った。

死ぬのは悲しいという念よりもこの苦痛に打ち克かとうという念の方が強烈であつた。一方にはきわめて消極的な涙もろい意い気く地じない絶望が漲るとともに、一方には人間の生存に対する権利というような積極的な力が強く横たわつた。

疼痛は波のように押し寄せては引き、引いては押し寄せる。押し寄せるたびに脣くちびるを噛かみ、齒をくいしばり、脚を両手でつかんだ。

五官のほかにある別種の官能の力が加わつたかと思つた。暗かつた室へやがそれとはつきり見える。暗色の壁に添うて高いテ-

ブルが置いてある。上に白いのは確かに紙だ。ガラス窓の半分が破れていて、星がきらきらと大空にきらめいているのが認められた。右の一隅には、何かごたごた置かれてあつた。

時間の経たつていくのなどはもうかれにはわからなくなった。軍医が来てくれればいいと思つたが、それを続けて考える暇はなかつた。新しい苦痛が増した。

床近く蟋蟀こおろぎが鳴いていた。苦痛に悶もだえながら、「あ、蟋蟀が鳴いている……」とかれは思つた。その哀切な虫の調べがなんだか全身に沁しみ入るように覺えた。

疼痛、疼痛、かれはさらに輾転反側した。

「苦しい！ 苦しい！ 苦しい！」

続けざまにけたたましく叫んだ。

「苦しい、誰か……誰かおらんか」

としばらくしてまた叫んだ。

強烈なる生存の力ももうよほど衰えてしまった。意識的に救助を求めると言うよりは、今はほとんど夢中である。自然力に襲われた木の葉のそよぎ、浪なみの叫び、人間の悲鳴！

「苦しい！ 苦しい！」

その声がしんとした室にすさまじく漂い渡る。この室には一月前まで露国の鉄道援護の士官が起き臥がしていた。日本兵が始めて入った時、壁には黒く煤すすけたキリストの像がかけてあった。今年の冬は、満州の野に降りしきる風雪をこのガラス窓から眺めて、その士官はウオツカを飲んだ。毛皮の防寒服を着て、戸外に兵士が立っていた。日本兵のなすに足らざるを言って、虹にじのごとき気焰きえんを吐いた。その室に、今、垂死の兵士の叫喚うめきが響

き渡る。

「苦しい、苦しい、苦しい！」

寂としてゐる。蟋蟀は同じやさしいさびしい調子で鳴いてゐる。満洲の広漠こうぼくたる野には、遅い月が昇つたと見えて、あたりが明るくなつて、ガラス窓の外は既にその光を受けていた。

叫喚、悲鳴、絶望、渠かれは室の中をのたうちまわつた。軍服のボタンは外はずれ、胸の辺はかきむしられ、軍帽は領紐あごひもをかけたまま押し潰つぶされ、顔から頬にかけては、嘔吐おうとした汚物が一面に附着した。

突然明らかな光線が室に射したと思うと、扉のところ、西洋蠟燭を持った一人の男の姿が浮き彫りのように顕あらわれた。その顔だ。肥つた口髭のある酒保の顔だ。けれどその顔にはここにこしたさつきあいぎようの愛嬌はなく、まじめな蒼あおい暗い色が上つてい

た。黙って室の中に入ってきたが、そこに唸うなって転ころがっている病兵を蠟燭で照らした。病兵の顔は蒼あおざめて、死人のように見えた。嘔吐した汚物がそこに散らばっていた。

「どうした？ 病気か」

「ああ苦しい、苦しい……」

とはげしく叫んで輾てんでん転した。

酒保の男は手をつけかねてしばし立って見ていたが、そのまま、蠟燭の蠟を垂らして、テーブルの上にそれを立てて、そそくさと扉の外へ出ていった。蠟燭の光で室は昼のように明るくなった。隅すみに置いた自分の背囊と銃とがかれの眼に入った。

蠟燭の火がちらちらする。蠟が涙のようににだらだら流れる。

しばらくして先の酒保の男は一人の兵士を伴って入ってきた。この向こうの家屋に寝ていた行軍中の兵士を起こしてきたのだ。

兵士は病兵の顔と四方あたりのさまとを見まわしたが、今度は肩章けんしょうを仔細しさいに検した。

二人の対話が明らかに病兵の耳に入る。

「十八聯隊れんたいの兵だナ」

「そうですか」

「いつからここに來てるんだ？」

「少しも知らなかったんです。いつから來たんですか。私は十時ころぐつつすり寝込んだんですが、ふと目を覚さますと、唸り声うなりこゑがする、苦しい苦しいという声こゑがする。どうしたんだろう、奥には誰もいぬはずだがと思つて、不審ふしんにしてしばらく聞いていたです。すると、その叫び声こゑはいよいよ高くなりますし、誰か來てくれ！　と言う声が聞こえますから、來てみたんです。脚あし気きですナ、脚気衝心けつきしょうしんですナ」

「衝心？」

「とても助からんですナ」

「それア、気の毒だ。兵站部に軍医がいるだろう？」

「いますガナ……こんな遅く、来てくれやしませんよ」

「何時だ」

みずから時計を出してみても、「道理だもつとも」という顔をして、そのままポケットに収めた。

「何時です？」

「二時十五分」

二人は黙って立っている。

苦痛がまた押し寄せてきた。唸り声、叫び声が堪え難い悲鳴に続く。

「気の毒だナ」

「ほんとうにかわいそうです。どこの者でしょう」

兵士がかれのポケットを探った。軍隊手帖を引き出すのがわかる。かれの眼にはその兵士の黒く逞たくましい顔と軍隊手帖を読むために卓上の蠟燭に近く歩み寄ったさまが映った。三河国渥美郡福江村加藤平作……と読む声が続いて聞こえた。故郷のさまが今一度その眼前に浮かぶ。母の顔、妻の顔、櫻けやきで囲んだ大きな家屋、裏から続いた滑なめらかな磯いそ、碧あおい海、なじみの漁夫の顔……。

二人は黙って立っている。その顔は蒼く暗い。おりおりその身に対する同情の言葉が交される。彼は既に死を明らかに自覚していた。けれどそれが別段苦しくも悲しくも感じない。二人の問題にしているのはかれ自身のことではなくて、ほかに物体があるように思われる。ただ、この苦痛、堪え難いこの苦痛から脱のがれたいと思つた。

蠟燭がちらちらする。蟋蟀が同じくさびしく鳴いている。

黎明あけがたに兵站部の軍医が来た。けれどその一時間前に、渠は既に死んでいた。一番の汽車が開路開路のかけ声とともに、鞍山站に向かつて発車したころは、その残月が薄く白けて淋さびしく空にかかっていた。

しばらくして砲声が盛んに聞こえ出した。九月一日の遼陽攻撃は始まった。

一兵卒

底本：「蒲団・一兵卒」角川文庫、角川書店

1969（昭和 44）年 10 月 20 日改版初版発行

1974（昭和 49）年 11 月 30 日改版 8 版発行

※混在している「満州」と「満洲」、「輻」と「輻」は底本通りとし、統一しませんでした。

入力：久保あきら

校正：伊藤時也

2000 年 9 月 28 日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。